

## 稻刈りが終わった田んぼを見て 10月

9月は「敬老の日」「秋分の日」があるので、米作りをしている農家にとっては3連休が2回ある貴重な月でした。しかし、次々と発生する台風で稻刈りの予定が狂ってしまった方も多いことでしょう。大切に育ててきた稲の収穫は、農家にとって大きな喜びになったことだと思います。私が子どもの頃には、刈った稲を天日で干すためにはざ掛けをしている光景がどの田んぼでも見ることができました。今は専業で稻刈りをしている方は少なく、また、天日で干すという時間的な余裕がないので稲の切り株だけが田んぼに残っています。そんな田んぼの姿を見ながら、稻刈り後の大地震で刈り取った貴重な稲を燃やして村人の命を救った話を思い出しました。それは1854年（嘉永7年/安政元年）の安政南海地震津波に際しての出来事をもとにした物語『稻むらの火』というお話です。



村の高台に住む庄屋の五兵衛は、地震の揺れのあと、海水が沖合へ退いていくのを見て津波の来襲に気付きました。祭りの準備に夢中になっている村人たちに危険を知らせるため、五兵衛は自分の田にある刈り取ったばかりの稲の束（稻むら）に松明で火をつけました。「庄屋さんの家が火事だ。」と見て、消防のために高台に集まった村人たちの眼下では、津波は猛威を振るい村を飲み込みました。五兵衛の機転によって村人たちはみな津波から守られました。

過去の経験や昔からの言い伝えで津波がすぐにやってくることを予想した人は、2011年に発生した東日本大震災でも、「すぐに高い所に避難しなければならない」ということを実行して多くの人の命を救いました。このことから、あらためて『稻むらの火』の話が日本中で見直されました。

幸いなことに、北久原区では津波の心配はありません。しかし、私たちは、いつどこでどのような災害に遭遇するかわかりません。巨大地震、線状降水帯など大雨による水害、富士山の噴火など災害のタイプが多様化、複雑化している現在であるだけに、『稻むらの火』に示された「素早い判断と指示」「何よりも人命尊重」を、これから防災で心掛けたいです。



参考

「稻むら」 刈り取った稲束または脱穀後の稲藁を積み重ねたもの